

コンラート・ゲスナー『万有書誌』の 書誌記述要素の起源について

雪 嶋 宏 一

1. 本稿の目的

筆者は拙稿においてスイスの博物学者コンラート・ゲスナー（Gessner, Conrad, 1516-1565）の初期の代表作『万有書誌（*Bibliotheca Vniuersalis*）』第 1 巻（Zürich : Christoph Froschauer, 1545）（以下 BV1 と略）には何人の著者が収録され、それらの書誌的な情報源はどのような資料が利用されていたのかという点について調査し、そこには大量の印刷本の情報が収録されていることを指摘した。そして、これらの印刷本の書誌記述要素は、著者名、出身地、職業あるいは専門分野、書名、巻数に加えて、印刷地、印刷者、印刷年、判型、葉数、内容解説、序文からの引用などから構成されており、そのことが「中世的な書誌記述を脱却して、近代的な書誌記述に近づいて」いるのであり、その点が『万有書誌』の大きな特徴であると述べた¹。

実際の書誌記述の一例を 16 世紀の人文主義者ベアトゥス・レナーヌス（Beatus Rhenanus, 1485-1547）の項目の中から引用してみよう。

Beati Rhenani Selestadiensis rerum Germanicarum libri 3, excusi Basileae in officina Frobeniana, anno 1531. in fol. chartis 49. （セレストア出身のベアトゥス・レナーヌスのゲルマニア人の歴史 3 巻はバーゼルのフローベン工房で 1531 年に二折判 49 紙葉で作成された。）（BV1, 140v）

この一文では、著者名、書名、巻数、印刷地、印刷業者、印刷年、判型、紙葉数の順で記述要素が並べられており、版の同定ができる情報を備えていることがわかるであろう。本書をドイツ 16 世紀印刷本のデータベース Verzeichnis der im deutschen Sprachbereich erschienenen Drucke des 16. Jahrhunderts (VD 16) で検索すると²，本書が R 2064 と同版であることが判明し，以下の目録情報を得ることができる。

Title: BEATI RHENANI | SELESTADIENSIS RERVVM GERMANI | CARVM LIBRI TRES

| ADIECTA EST IN CALCE EPISTOLA AD | D Philippū Puchaimerū, de locis Plinij per St.
Aquaem | attactis, ubi mendae quaedam eiusdem autoris | emaculantur, antehac non à quo/ |
quam animaduersae.

Ausgabebezeichnung: BASILEAE, IN OFFICINA FROBENIANA, | ANNO M.D.XXXI | (PER
HIERO | NYMVM FROBENIVM, IOANNEM HERVAGIVM, | ET NICOLAVM EPISCOPIVM.
| ... MENSE MARTIO |)

Impressum: Basel : Froben, Johann (Erben), 1531.

Kollation: 194 S. [1] Bl. : D. ; 2.

この目録から古版本デジタル・アーカイブへのリンクがあり、全文をデジタル画像で見ることができ。ゲスナーが記述した書誌は本書の標題紙の3行目までと刊記の2行分であることが確認できる。ただし、LIBRI TRES は libri 3, M.D.XXXI は 1531 と読み替えている。さらに、ゲスナーは判型 ‘in folio’ と紙葉数 ‘chartis 49’ を加えている。本書にはページ付けがあるが、ゲスナーは紙葉数（シート数）を数えている。二折判で49シートとすれば98 leavesで196ページ分になる。VD16では194ページ+1葉（196ページ相当）とあることからゲスナーが提示したデータと一致している。この比較で判断できるのは、ゲスナーは書誌を作成するにあたり、本書を調査し、本書の標題紙を単純に書き写すのではなく、タイトルと刊記の一部とコレーションを一定の方法で記述したことが分かる。

本稿ではゲスナーが採用したこのような書誌記述について検討することを目的とし、ゲスナーがこれらの記述要素をどのような先例を参照して採用するに至ったのか。そして、そこにはゲスナーの独自性や革新性があったのかという点について明らかにしたい。そのためには、ゲスナーがBV1編纂の際に情報源として利用した書誌・目録類や様々な参考文献に見られる書誌の記述要素を検討する必要があるため、これらの情報源を取り上げて分類し、彼が採用した記述要素はどのような情報源に起源があるのか考察する。さらに、そこにはどのようなゲスナーの独創性があるのか論じる。

2. ゲスナーの書誌記述要素に関するこれまでの見解

ゲスナーによる印刷本の書誌の記述要素について、L. バルサーモ (Balsamo, Luigi) は「彼 [= ゲスナー] は、技術的に極めて向上した『公式 (formula)』に拠って書誌情報を完成させ、拡大した」と評価し³、さらに、

読者が自由にそして賢く選択できるよう手助けし、彼らを無能な詐欺まがいの本屋から守るために、書誌記述の公式 (formula) がさらに十分に展開された。著者と書名の他に、書物の判型、ページ数、価格とともに印刷事項（印刷地、印刷者、印刷年）が与えられた。

と「公式」について説明している⁴。つまり、ゲスナーは、他の版と区別するために印刷本の版を同

定可能にする記述を行ったというのである。実際にはゲスナーはBV1ではページ数と価格については記述していないが、バルサーモに依れば、後の図書館目録で一般的に採用された印刷書の目録記述の要素の原型はゲスナーが完成させたということになる。

ところが、ゲスナーが採用した印刷書の書誌の記述要素はゲスナーのまったくの独創であろうか。あるいは、ゲスナーは参照した様々な資料の中にその原型を見出したのであろうか。その点については、E. ボッタツソ (Bottasso, Enzo)、バルサーモ、A. セッライ (Serrai, Alfredo) らが論及している。

まず、ボッタツソはイタリア図書館史の立場から、ツヴィングリ (Zwingli, Huldreich, 1484-1531) の旧蔵書をもとに設立されたチューリヒ学校 (Schola Tigurina) の図書館の館長となったコンラート・ペリカン (Pellikan, Conrad, 1478-1556) が作成した図書館の蔵書目録に注目して次のように言及している。

彼 [=ゲスナー] のヘブライ語の師はコンラート・ペリカンであり、ペリカンは1532年に何とすでに、かような方向で4つのリストに分割する目録 (著者名は少なくともおおよそのアルファベット順, 地勢学 [topografica] の番号順, 主題の体系順とアルファベット順) の計画を構想していた。書物の配列, さらに記述と選択の案内を提供するために同様な意図をもって、ゲスナーは1545年の大冊で後者 [=ペリカン] に従うことにした⁵。

つまり、ゲスナーは書誌の著者名順の配列方法、記述、分類、書物の選択についてペリカンが作成した目録を範としたということになり、書誌の記述要素についても参考にした可能性を示唆した。しかし、ボッタツソは具体的な事例を挙げているわけではなく、根拠となる参考文献も示していない。ペリカン作成の図書館目録については筆者は未見であるが、すでにH. エッシャー (Escher, Hermann) が説明している。彼によれば、これら4つのリストとは、①著者名の頭文字に基づく著者名順目録、②本来の在庫目録 (Inventarkatalog) とシェルフリスト (Standortskatalog)、著者名とかろうじて書名のみ、③21分野による著作目録、④件名目録であるという⁶。つまり、ボッタツソの見解は十分な根拠に基づいていないことが判明する。

一方、バルサーモは次のように示唆している。

しかし、それら [=印刷出版広告] の重要性は無視すべきではない。なによりもまず、それらは学問的・科学的な書誌が登場する以前には、多量に配布するための書誌情報の最初期の道具であった。後の書誌の編纂者たちは、同時代の印刷業者と出版者の目録を図書館目録と同様に利用した。ゲスナーと彼に続く者たちはこの行為をはっきりと認めていた⁷。

すなわち、ゲスナーはBV1の編纂において印刷出版広告を大いに参考にしていたということである。

その点については拙稿でも言及したが⁸、『万有書誌』の第2巻『総覧 (Pandectarum)』(Zürich : Christoph Froschauer, 1548) (以下 BV2-1 と略) および『神学の部 (Partitiones Theologicae)』(Zürich : Christoph Froschauer, 1549) (以下 BV2-2 と略) の各分類の冒頭でゲスナーが同時代の印刷業者に讃辞を捧げて紹介し、彼等が印刷出版した書物を取りあげたことから明らかであろう。しかしながら、バルサーモは、ゲスナーがこれらの目録から書誌の記述要素の原型を見出したとは述べていない。

一方、セッライは次のような意見を表明している。

また、その [=『万有書誌』] の独創性が「チューリヒの図書館」のためにコンラドゥス・ペリカヌスによって作成された類似する目録記述の構成にまったく確かに由来するものであるとしても、ゲスナーの作業と実現の意図と計画は偉大なる重要性を残すものである⁹。

つまり、セッライは、コンラート・ペリカン (Pellican, Conrad, 1478-1556) が作成した「チューリヒの図書館」 (=チューリヒ学校の図書館) の目録を参考にしながら、ゲスナーはそれを上回る書誌を作成したとみなしている。しかし、セッライもまたペリカンの目録の実例を示しておらず、実際ゲスナーがどのような点をペリカンの目録から学んだのか明らかにしていない。ゲスナー自身も BV1 の序文と ‘CONRADVS Pellicanus’ の項目 (BV1, 183v-185r) の中でペリカン作成の目録については何も言及していない。

チューリヒ学校の図書館について概要を示した U. B. ロイ (Leu, Urs B.) 等はペリカンについて言及し、図書館蔵書中にゲスナー自身の書き込みある本が多数あると述べているが、図書館蔵書が当時の学者たちのニーズを満たすほどではなかったとも指摘している。しかし、ペリカンの目録がゲスナーにどのような影響を与えたかについては何も言及していない¹⁰。

このように、これまでの研究では、ゲスナーの書誌はペリカンが作成したチューリヒ学校の図書館目録を参考にしたという見解と、当時の印刷所が発行していた印刷販売書目録を大いに参考にしたとみなす見解とがあるが、記述要素がどこに起源するものであろうかという点については未だ十分に解明されたと言うことはできないであろう。

3. BV1 の情報源の分類

すでに拙稿でも論じた BV1 の情報源¹¹ について再確認するため、改めてこれらの情報源を次のように3つ大別して概観してみよう¹²。

I. 分野別の情報源

1. 聖職者に関する情報源
2. 散逸した古代文献の情報源
3. 医学関係の情報源

4. 法学関係の情報源
 5. 古典学の情報源
 6. 詩人に関する情報源
- Ⅱ. 図書館の蔵書および蔵書目録
- Ⅲ. 印刷販売書目録

3.1. 聖職者に関する情報源

ゲスナーにとって聖職者に関する情報にとって最も重要な情報源は、トリテミウス (Trithemius, Johannes, 1462-1516) 『聖職にある著者たちあるいは貴顕なる人々の目録 (*De scriptoribus ecclesiasticis*)』 (Basel : Johann Amerbach, 1494) である。トリテミウスは、古代末期のヒエロニウムス (St. Hieronymus, Sophronius Eusebius, a. 340-420) 『聖職にある著者たちについて (*Scriptorum ecclesiasticorum vitae*)』と5世紀のゲンナディウス (Gennadius, Massiliensis) 『貴顕なる人々の目録 (*Illustrum uirorum catalogus*)』を基礎として、15世紀末までに執筆活動を行ったキリスト教聖職者の著者を追加して、著者を生存年代順に配列した。ゲスナーが参照したヒエロニウムスとゲンナディウスの目録はバーゼルのクラタンデル (Cratander) 印刷所から1529年に四折判で合刻印行された版であることがBV1の‘GENNADIVS Massyliensis’の項目から推定することができる (BV1, 267v)¹³。ヒエロニウムスもゲンナディウスの目録も著者の略伝を綴りながら、その著作について書名と巻数を列挙するもので、いわばbio-bibliographyであった。トリテミウスの『目録』も基本的にこの伝統を踏襲するものであるが、大幅な増補を行い15世紀末までの著者約1,000人を収録する大規模な著者目録となった点は大きな成果である。ゲスナーは初版とその第3版ケルン版 (1531年) を参照している¹⁴。トリテミウスは生前この目録の改訂増補版をパリで1512年に刊行した。ケルン版はトリテミウス没後に刊行されたもので、内容は第2版と同じである。記述方法は、著者に関する名・姓 (出身地名)、出身地 (あるいは出身国)、職業あるいは専門分野、略伝などの伝記事項、それに続いて著作一覧 (書名・巻数)、そして最後に死亡年を置いている。

ゲスナーはトリテミウスの記述のうちしばしば略伝を簡略化したり、あるいは省略したりしているが、著作一覧は文字通り全て引用して省略していない。反対に死亡事項については全て省略している。ゲスナーは著作一覧に続いて著作に関する追加の情報や、印刷出版された書物がある場合には、それらについて独自に追加している¹⁵。このように、ゲスナーにとってトリテミウスは著者とその著書に関する情報源としては非常に重要であったが、印刷本の書誌を記述するためには不十分なものであった。

3.2. 散逸した古代文献の情報源

ゲスナーは『万有書誌』執筆の目的の一つとして散逸した文献 (non extantium) も収録することを標題で明記している (BV1, title page)。そのため、古代の文献中で言及されているがゲスナーの

時代にはすでにその存在を知ることができなかった逸書を知るため、古代の著述家の事績や作品の断片が書き残された文献を渉猟している。特に、10世紀末に編纂された事典『スーダ（Sudaあるいは Suidas）』、後2世紀のアテナイオス（Athenaios）『食卓の賢人たち（*Deipnosophistai*）』、哲学者の伝記を執筆した後3世紀のディオゲネス・ラエルティオス（Diogenes Laertius）『ギリシア哲学者列伝（*Vitae et sententiae philosophorum*）』、古来伝わってきたエピグラムを集めた『ギリシア詞華集（*Anthologia Graeca*）』、初期キリスト教徒の書簡に言及した教父キュプリアヌス（St. Cyprianus, ca. 200-258）、古代の著述家の断片を集めた5世紀のストバエオス（Stobaeus）『格言集（*Gnomologia*）』などに記録された逸書に注目して、それらから注意深く著者を抽出して人名項目として取り上げた。中でも特に古代の著述家については『スーダ』を典拠としている項目が多いことは拙稿で述べた¹⁶。ゲスナーはバーゼルのフローベーン（Froben, Hieronymus）による1544年版の『スーダ』を参照したようだ（BV, 604v）。その記述方法は次のようなものである。

DAMOPHILVS philosophus sophista, educatus à Iuliano, consul sub Marco imperatore, permulta scripsit, ex quibus inueni in bibliothecis, Philobiblum primum de libris comparatu dignis, Ad Lollium Maximum de uitis antiquorum, & alia plurima. Suidas.

（ダモフィルスは、哲学者にしてソフィスト、ユリアヌスに由来する教育者、皇帝マルクスの下での執政官であり、多数の執筆を行った。その中から私が図書館で出会ったのは『フィロビブルス（愛書家）』第1巻であり、ロリウス・マキシムスの『古代人の生活について』やその他多数と比較する価値のあるものである。スイダス。）（BV1, 194v）

これはスーダの記述を引用したもので、著者と職業・地位、著作への言及からなる。一方、アテナイオスからの記事はもっと簡略である。

DEMOCRITI Ephesij liber de templo in Epheso, citatur Athenaeo.（エフェソスのデモクリトスの書『エフェソスの神殿について』はアテナイオスにより引用されている。）（BV1, 195r）

ゲスナーは著者、書名および情報源のみを記述している。このように、逸書についての記述はいずれの場合にも簡略であるが、その典拠をそれぞれ明示したことはゲスナーの学問態度に近代性を見ることができよう。

3.3. 医学関係の情報源¹⁷

医学に関する情報源については、ゲスナーは序文末尾で、16世紀初頭リヨンの市医にしてガレノスの研究を行い、また歴史家であったシンフォリアン・シャンピエ（Champier, Symphorien, 1471-1538）による『医学の卓越した著者たちについて（*De medicine claris scriptoribus*）』を挙げている¹⁸。

本書はリヨンで1506年に初版が刊行された最初の医学書の目録であり、ゲスナーは1532年リヨン刊行の八折判の論集を参照したと記述している(BV1, 606r)¹⁹。本書は、古代の医学者の概要、医学書を著した哲学者、および聖職者、イタリアの医学者、フランス、スペイン、ドイツ、英国の医学者の5部に分かれ²⁰、おおむねギリシア神話の時代から古代・中世を経て15世紀に至るまでの医学者の略伝とその著作・巻数が記述された。記述の主体は略伝にあり、著作についての言及は限られているため、書誌のような利用はできない²¹。

シャンピエに続く医学・本草学の目録となったオットー・ブルンフェルス(Brunfels, Otto, 1488-1534)の『卓越した医者たちの目録(*Catalogus illustrium medicorum*)』が1530年にシュトラスブルクから刊行された。内容はシャンピエよりも単純で、ガレノス(Claudius Galenus)に至る医学書を著した約300人の医学者をおおよそ年代順に配列して²²、著作とその内容について述べたものである。特にガレノスについては書名・巻数からなる著作の一覧が掲載され、ガレノス以降の医学者については簡略にまとめられている。巻末には本文中で言及された医学者が分野別に一覧されている。ゲスナーはガレノス("CL. GALENVS")の項目の中で伝記事項についてはブルンフェルスのこの著作を参考に行っている(BV1, 169v)。

しかし、書誌の記述要素についてはそれまでの域を出るものではない。

3.4. 法学関係の情報源

法学関係書の最初の目録はジョヴァンニ・ネヴィツァーノ(Nevizzano, Giovanni, ラテン語 Johannes Nevizanus, d. 1540)による『両法律におけるこれまで印刷された書物の一覧(*Inventarium librorum in utroque jure hactenus impressorum*)』(Lyon, 1522)であると言われている²³。彼が取上げた書物は教会法と市民法の「両法律」であり、それらは印刷本を対象としていた。ゲスナーはネヴィツァーノの著作として『婚礼の木立ち(*Sylva nuptialis*)』の次に本書を*Index scriptorum in utroque jure*という書名で記録した。それに続いて、ルイス・ゴメス(Gomez, Luis)が増補し、その後ヨハンネス・フィカルドゥス(Fichardus, Johannes)が増補したことも記述している(BV1, 442r)。つまり、ゲスナーは本書の初版を参照したわけではなく、実際に利用した版は序文に記されたように(BV1, *6v)、このフィカルドゥスが増補した『我々の時代に至るまでに実際に再調査されたこと(*Recentiorum vero, ad nostra usque tempora*)』であり、それは1539年バーゼルのロベルト・ヴィンター(Winter, Robert)版であった²⁴。この版には同時にベルナルドゥス・ルティリウス(Rutilius, Bernardus, イタリア語形 Rutilio, Bernardo)による『法律家の生涯(*Iurisconsultorum uitae*)』が合刻され、古代から15世紀当時までの法律家の事績が綴られた。それらの記述は、やはり法律家の略伝が主体であり、著作の一覧があるわけではなく、さらに印刷本の版を示す記述もないため、法律家の著作の情報を知るには不十分なものである。

ゲスナーは序文では取り上げていないが、本文中で時折参照していたのがアンゲルス・デ・クラウシオ(Angelus de Clavasio, ca.1410-1495)の『良心問題大全(*Summa anglica de casibus conscientiae*)』

である。本書は15世紀から多数の版が刊行されていたが、筆者の調査によればゲスナーが参照したのは1495年ヴェネツィアのジョルジョ・アッリヴァーネ版である²⁵。本書は聴罪司祭用のマニュアルであり、司祭が信徒の懺悔に際して教会法に基づいて対応するための手引書である。ゲスナーは本書にある神学者と教会法・市民法学者の一覧を利用して、情報源の乏しい著者を抽出して人名項目として取り上げた。アンゲルス・デ・クラワシオの記述は人名のみの簡単なものであった。

3.5. 古典学の情報源

ゲスナーは古代から当代にいたる人文主義の学問の中心をなす古典の著述家について知るために前述の『スーダ』を基本にして、さらにラファエルス・ヴォラテッラヌス(マッフエイ)(Volaterranus, Raffaellus, イタリア語名 Maffei, Raffaele, 1451-1525)の『人間の学(Anthropologia)』を利用したことを序文で明記している(BV1, *6v)。本書は『ローマ人の覚え書き38書(Commentarius urbanorum, octo et triginta libri)』という地理学(2~12書)、人間の学(13~23書)、文献学(24~38書)の分野の著者たちの事績を概観した浩瀚な書物の第2部である。ゲスナーはBV1の本文中で1530年バーゼル版に基づいて、本書が古代ギリシャの著述家クセノフォン(Xenophon)の『家政論(Oeconomicus)』を踏まえたものであると説明し、その百科事典的な内容を全巻にわたって詳述している(BV1, 578r-v)。しかし、マッフエイ自身の記述は、「地理学」ではローマの昔と今についての記述を網羅した地理学発達史であり、「人間の学」では、古代の命名のアルファベット順の最初の歴史事典であり、そして当代の著名な人々の分野と職業について述べたものである。最後の「文献学」では、動物、植物、金属、鉱物、文法、修辞学、自然史に関する体系的な術語の意味を示すことを目的としていた。つまり、そこには古代から当代までの著述家が多数登場するが、彼らの事績を記述するものであり、その著作の書誌情報を示すものではなかった。

ゲスナーはその他にも古典学関係では人文主義者フアン・ルイス・ビベス(Vives, Juan Luis, ラテン語名 Ioannes Lodovicus Vives, 1493-1540)の著書も参照している。スペインのパレンシア出身でルーヴェン大学教授となり、後に英国王ヘンリー8世に招聘されたが、国王の結婚無効に反対したため、低地地方のブルージュに退去して著述活動を行った。ビベスはエラスムス(Erasmus, Desiderius, 1466-1536)と親交が深く、エラスムスから大きな影響を受けている。ゲスナーが取り上げた16世紀の同時代の学者の中ではビベスはエラスムスに次いで記述が豊かで、ゲスナーはビベスの多数の著作に言及し、主要な著作の目次・内容・序文などを記述している(BV, f. 430v-434r, 364行)。ビベスへの参照回数は『スーダ』とマッフエイに比べれば少ないが、ゲスナーは、ディオゲネス・ラエルティウス(BV1, 207v-208r)、ルキアヌス(Lucianus, Samosatensis)(BV1, 484r-v)、クイントゥス・クルティウス(Quintus Curtius)(BV1, 575r)などの古代の著述家ばかりでなく、テオドロス・ガザ(Gaza, Theodorus, 1410-75)(BV1, 611v-612r)、トマス・リナカー(Linacre, Thomas, 1460-1524)(BV1, 617v-618r)、トマス・モア(More, Thomas, 1478-1535)(BV1, 618r)などの15-16世紀の人文主義者を記述する際にも典拠としている。ゲスナーはビベスの主著『学問

論 20 書 (*De disciplinis libri XX*)』についてはケルンのヨハン・ギムニクス (Gymnicus, Johann) が 1532 年に刊行した版を参照している (BV1, 431v)²⁶。例えば、ゲスナーはガザ、リナカー、モアの評価についてこの『学問論 20 書』から引用している。ビベスはガザについては “Theodorus Gaza plurimum locupletare potest nostram linguam uerte<n>dis ad nos Graecis:” と記述しており (p. 327), ゲスナーはこの文章をそのまま引用している (BV1, 611v)。リナカーについては、ビベスは次のように言及する。 “... suo studio hos legat: in arte grammatica Thomam Linacrum, à quo multa sunt Latinae linguae mysteria ostensa, ac sine impietate prodita. Io. Lud. Viues.” (p. 316)。ゲスナーはこの文章を次のように引用している (BV1, 617v)。 “Legat discipulus seoesim in arte grammatica thomam Linacru<m>, à quo multa sunt Latinae linguae mysteria ostensa, ac sine impietate prodita.” モアについては、ビベスは、 “Acutus Thomas Morus, & plenus aculeis, ac ingenij.” と記述するが (p. 329), ゲスナーは、 “Io. Lud. Viues, ubi de poëtis loquitur: Acutus est (inquit) Thomas Morus, & plenus aculeis ac ingenij.” と記述する (BV1, 618r)。このように、ゲスナーはビベスによる評価を参照しながら、著者とその著作について記述しようとしたのであるが、書誌の記述要素をビベスから学んだわけではない。

3.6. 詩人に関する情報源

ゲスナーは序文末尾でラテン詩人に関する参考文献としてクリニトゥス (Petrus Crinitus, イタリア語名 Pietro Crinito, 1475-1507) の『ラテン詩人について (*De poetis Latinis*)』とリリウス・グレゴリウス・ギラルドゥス (Lilius Gregorius Gyraldus) 『詩人たちの博学なる対話 10 編が記録された歴史 (*Historia poetarum dialogis decem doctissimis conscripta*)』を取りあげている。前者についてはバーゼルのハインリヒ・ペトリ (Petri, Heinrich) による 1532 年版 (BV1, 548r)²⁷, 後者についてはバーゼルのミヒャエル・イーゼングリン (Isengrin, Michael) による 1545 年版を参照している (BV1, 483r)²⁸。特に、ギラルドゥスについては BV1 の「L」項目以降で 20 回程度引かれているが、プラウトゥスやテレンティウスなどを除いてその多くが記述の少ないマイナーな詩人たちで、 ‘Vide Gyraldum’ (ギラルドゥスを見よ) という簡単な言及である。

一方、クリニトゥスは 1 章に詩人一人ずつを割り当てて、評伝を綴っており、ギラルドゥスより詳しい情報を提供しているが、ゲスナーはなぜかクリニトゥスを採用せずギラルドゥスを参考文献に挙げている。例えば、クリニトゥスは第 8 章でテレンティウスを取りあげて、詩人の生い立ちから詩の特徴、ホラティウスとの関係などを比較的詳しく述べているが、ゲスナーはテレンティウスの項目をわずか 5 行しか記述せず、ギラルドゥスのみを参照している (BV1, f. 573v)。いずれにせよ、これらの詩人たちに関する情報源から作品の書誌的な事項を採取することはできない。

以上のように、これらの分野別の参考文献によってゲスナーは古代から当代に至る膨大な著述家の伝記事項とその著作の内容や評価について知ることはできたが、本稿のテーマである印刷本の書誌記述要素にとってはそれらも有効なものではなかった。

4. 図書館蔵書目録

ゲスナーが利用した図書館および図書館の蔵書目録については拙稿でも取り上げたが²⁹，再度ここに列挙したい。ゲスナーが利用した図書館とその蔵書目録は以下の通りである。

1. 実際に利用した図書館

ヴェネツィア

- 1) ベッサリオン（Bessarion）の図書館（ギリシア語書とラテン語書の索引）
- 2) 聖ヨハネ&パウロ修道院図書館（ギリシア語書とラテン語書の索引）
- 3) 聖アントニウス図書館（ギリシア語書とラテン語書の索引）
- 4) ディエゴ・ウルタド・デ・メンドーサ（Mendoza, Diego Hurtado de, 1503-75）の図書館

ボローニャ

- 5) 聖救世主聖堂図書館（ギリシア語書とラテン語書索引）

アウクスブルク

- 6) ヤーコブ・フッガー（Fugger, Johann Jacob, 1516-75）家の図書館と市立図書館（ギリシア語書の索引）

2. 図書館目録のみを利用した図書館

ローマ

- 7) ヴァティカン教皇庁図書館（ギリシア語書索引）

フィレンツェ

- 8) メディチ家図書館（ギリシア語書索引）

3. 利用したのか目録情報のみを知っていたのか不明な図書館

- 9) ウィーン 図書館
- 10) ハイデルベルク 図書館

4.1. 実際に利用した図書館

1) ベッサリオンの図書館はギリシアからイタリアに渡った枢機卿ベッサリオン（Bessarion）のギリシア語写本 476 点とラテン語写本 263 点からなる個人蔵書で，1468 年にヴェネツィア市に寄贈されたものである。しかし，収蔵施設がなく，長らくサン・マルコ大聖堂の上階に箱詰めのまま置かれていた。ゲスナーがヴェネツィアを訪問した 1543 年夏にはまだサン・マルコ図書館は建設中で完成しておらず，蔵書も公開されていなかった。ゲスナーがヴェネツィアに滞在した当時に見ることができた目録はおそらくは 1468 年に作成された最初のものであろう。1543 年に新たに書かれた

目録があるが、それは 1545/46 年に清書された目録の下書きのようなもので不完全なものであり³⁰、ゲスナーがそれを見る機会があったとは思えない³¹。また、ゲスナーがこの蔵書を直接見たかどうかさえ BV1 では確認できない。サン・マルコ図書館は 1553 年に開館したが、ベッサリオンの蔵書は 1559 年以降に搬入された³²。

2) 聖ヨハネ&パウロ修道院はヴェネツィア最大の修道院で、16 世紀には図書館が付属していた。ベッサリオンの蔵書を収蔵するためにここに一時移動したが、設備的な問題があって実現しなかった。ゲスナーはその蔵書中のギリシア語写本について時折言及している (cf.: BV1, 42v: Andronici)。ゲスナーはこの図書館でどのような目録を見たのかは定かではないが、当時の図書館ではレクターにシェルフリストが掲げられていたことを考慮すると、シェルフリストを参照した可能性があろう。

3) ゲスナーがヴェネツィアに滞在した当時、聖アントニウス修道院の図書館には哲学者ジョヴァンニ・ピーコ・デッラ・ミランドラ (Pico della Mirandola, Giovanni, 1463-94) のギリシア語書とラテン語書からなる膨大な旧蔵書のうちの多くのものが収蔵されていたという³³。ゲスナーはピーコ・デッラ・ミランドラの著作については比較的詳しく解説しているが、彼の蔵書については何も言及していない (BV1, 447r-v)。また、聖アントニウス図書館の蔵書については BV1 ではたった 1 回しか言及していないため (BV1, 269v: Georgius Lapihae Cyprij)，ゲスナーがどのような目録を見たのかは定かでないが、やはりシェルフリストを参照した可能性があろう。

4) メンドーサは駐ヴェネツィアのスペイン大使で書物の収集に大変熱心で、ヴェネツィア駐在中にはオランダ人司書アルノルドゥス・アルレニウス (Arnoldus Arlenius, ca. 1510-82) を雇って膨大なギリシア語・ラテン語写本を収集させ、学者に公開していた。ゲスナーはこの蔵書を直接利用して、ギリシア語写本を熱心に探索し、多くのギリシア語写本について言及したものとみなされよう。言及した回数ではヴァチカン図書館に次ぐ回数である。メンドーサはスペイン帰国後、蔵書をスペイン国王に献呈した。それが王宮修道院エル・エスコリアル (El Escorial) 図書館の蔵書の核となった。

5) ゲスナーがボローニャに赴いていることは彼の記述から明らかである³⁴。ボローニャの聖救世主聖堂図書館は 1522 年に改修されたもので、ギリシア語書を含む 659 作品が収蔵されていた³⁵。ゲスナーは BV1 の中で 10 回ほどこの図書館所蔵のギリシア語写本に言及している。しかし、反宗教改革の中でプロテスタント書は破棄され、エラスムスの著・編書には白亜の溶液がまき散らされたという³⁶。この図書館の当時の目録がどのようなものであったのかは詳らかでないが、やはりシェルフリストを参照した可能性があろう。

6) ゲスナーはアウクスブルクのフッガー家より司書として招聘され 1545 年夏にアウクスブルクに赴いている。その際にフッガー家の図書館と市立図書館 (bibliotheca publica Augstae Vindelicorum) でギリシア語写本を見ているようである。本書後半の 'M' の項目から 12 回ほど言及があるが、そのうち 3 回は 'bibliotheca publica' と明記しているが、残りはたんに 'bibliotheca' である。これらが同じ図書館を指しているのか、明確に区別しているのかは定かではないが、少な

くとも ‘bibliotheca publica’ の場合は市立図書館であることは間違いなかろう。古代ギリシア史を叙述したポリュビオス (Polybius) (BV1, 567r) などの写本の所在を記録している。なお、1595 年に刊行された市立図書館のギリシア語書の目録 David Hoeschel (編) *Catalogus Graecorum codicum qui sunt in Bibliotheca Reip. Augustanae Vindelicæ* には写本と印刷本が区別なく配列され、著者、書名、内容注記、羊皮紙 (membrana)・紙 (charta) の区別、判型が記述され、印刷本については欄外に印刷事項が小さな活字で印刷されているが、記述要素は定形化されていない。ゲスナーが訪問した当時にこのような目録がすでに作成されていたかどうかは詳らかではないが、目録の基礎となるシェルフリストが存在した可能性はあろう。しかし、ゲスナーは目録について何も言及しておらず、またこの訪問が 1545 年夏であり、ゲスナーがすでに『万有書誌』のほとんどもを執筆し終えていた時期であることから、そこからの影響を考えることは實際上無理であろう。

4.2. 図書館目録のみを利用した図書館

7) ゲスナーは、「ローマのヴァティカン図書館に保存されています (Romae seruatur in bibliotheca Vaticana)」(BV1, 2v: ACHILLES author Graecus), 「ヴァティカン図書館の目録で読みました (in bibliothecae Vaticanae catalogo legi)」(BV1, 2v: Actuarius Ioannes), また「ギリシア語のものがローマのヴァティカンにあります (Graece Romae in Vaticana)」(BV1, 1v: AESOPI) と頻繁に言及している。しかし、彼がローマを訪れた形跡はない。ところが、彼はヴァティカン図書館に多数のギリシア語写本が所蔵されていることは知っていたはずであるから、その目録の写しを入手して調査する必要があった。

それでは、彼が頻繁に参照したヴァティカン図書館の目録はどのようなものであったろうか。ヴァティカンにおいてギリシア語写本の収集が本格的に始まったのは、学問に関心が高く、自ら愛書家として書物を収集し、学者を集めてサロンを主宰したニコラウス 5 世 (Nicolaus V, 在位 1447-55) からである。収集したラテン語およびギリシア語の写本目録は次の教皇カリクストゥス 3 世 (Calixtus III, 在位 1455-58) の時代に作成された。1455 年の目録では約 1,500 冊の蔵書のうちギリシア語書が 353 冊あった³⁷。しかし、ギリシア語書の目録は今日ではスペインのピーク大聖堂に残っているのみで広く知られていたものではなかった³⁸。

次にヴァティカンにおけるギリシア語書の収集はシクストゥス 4 世 (Sixtus IV, 在位 1471-84) によるものである。彼はギリシア・ラテン語写本を収集して、1475 年には約 2,500 冊に達したという。そして、Platina と呼ばれる司書を任命して、新たな図書館をローマのサント・スピリト病院 (Ospedale di Santo Spirito) 内に開設した³⁹。そして、1475 年、1476 年、1497-80 年、1480-81 年の 4 回にわたって蔵書リストが作成された。1475 年のリストにはギリシア語書 770 冊、ラテン語書 1757 冊からなる 2527 冊収録されていた⁴⁰。そして、1481 年の目録には約 3,500 冊が収録された。図書館の場所もヴァティカン内のニコラウス 5 世紀の邸宅に置かれた⁴¹。ゲスナーが『万有書誌』を編纂した 1540 年代前半のヴァティカンの図書館はこのシクストゥス 4 世の図書館であったため、ゲスナーはおそら

く1481年の目録を参照したとみなせよう。目録全体は著者名・分類名混排のアルファベット順となり、分類内は著者名・書名順で、目録の記述要素は、著者名、書名、巻数、葉数、あるいは著者名、書名、羊皮紙本 (ex membr.)・紙本 (ex papiro) の別、目次 (tabula) の有無などで、印刷本を記述するのに参考となるものではなかった。

8) フィレンツェのメディチ家図書館 (Biblioteca Medicea-Laurenziana) は1534年に教皇クレメンス7世の命によってサン・ロレンツォ修道院回廊の3階に建設されることになった。設計はミケランジェロに委嘱されたが、図書館の開館は1571年であった。メディチ家の蔵書の収集はロレンツォ・デ・メディチ (Lorenzo de' Medici, 1449-92) の時代に本格化して、写本が1,000冊になり、続いてサン・マルコ修道院の蔵書の一部が寄贈されるなどして増加し、図書館開館時には2,500冊に達していた。図書館に収蔵された書物は全て写本であり、印刷本はなかった。開館時に掲げられたシェルフリストの記述要素は、著者名、書名、巻数、羊皮紙本・紙本の別、写本製作時期となっていた⁴²。したがって、ゲスナーがイタリアに滞在した当時はまだ図書館は建設中であり、蔵書目録もなかった。それではゲスナーはどのような目録で蔵書を知ることができたのか。おそらく、メディチ家が作成していた在庫リストではなかろうか。それがどのような記述のものか定かでないが、写本の所蔵を確認するだけの記述がなされていたものと思われる。

一方、サン・マルコ修道院図書館 (Biblioteca di San Marco) はメディチ家の図書館が開館する以前にはフィレンツェ最大の図書館でありラテン語書1,053冊、ギリシア語書176冊が所蔵されていた。1499-1500年に作成された手書きの目録 (*Repertorium sive Index Librorum Latinae et Graecae bibliothecae conventi S.C.I. Marci de Florentia*) の一部が修道院に残されている。その聖書の写本の記述の一例では、書名、文字装飾、羊皮紙本、判型の大小からなっている⁴³。したがって、メディチ家の初期の蔵書リストもこのような記述の域を出るものではなかった可能性があり、印刷本の書誌記述の参考にはならなかったであろう。

4.3. 利用したのか目録情報のみを知っていたのか不明な図書館

9) ゲスナーはウィーンの図書館について5回ほど言及している。例えば、*quae [=libri] Viennae Austriae in biblioteca facultatis artium extant* (それら (=書物) はアウストリアのウィエンナの諸学 (artes) 学部図書館にあります) (BV1, 271v: Georgius Pruner ex Ruspach) とある。しかし、その情報源は記録されていない。ゲスナーが1545年までにウィーンに赴いた形跡はないので、このような同時代的な情報は伝聞ということになる。ゲスナーは友人たちとの書簡によって情報収集していたことを序文で述べている⁴⁴。

10) ハイデルベルクの図書館については1回のみ言及している (BV1, 499v: Marsilius de Ingen)⁴⁵。ゲスナーは1543年にフランクフルトの大市へ出かけている。ハイデルベルクはその途上にあるため、ゲスナーがハイデルベルクの図書館を訪問した可能性は否定できない。しかし、当時のハイデルベルクの図書館は15世紀に設立された神学校の図書館であり、選帝侯オットインリヒ (Ottheinrich

von den Pfalz, 1502-59) による著名な Bibliotheca Palatina が創設される以前であった。ところが、1544 年 11 月にオッタインリヒが図書館創設のためにシュトラスブルクのマルティン・ブーツァー (Bucer, Martin, 1491-1551) を通じてまだ印刷中の BV1 の紙葉を送ってほしいと依頼してきたという⁴⁶。もし、ゲスナーがこの図書館を訪問していないとすれば、このような接触によってゲスナーのもとにハイデルベルクの情報が届いたということも考えられよう。

以上のように、ゲスナーは図書館の蔵書や目録を調査して多数の書物の所在を明示しているが、それらは写本、特にギリシア語の写本を対象にしたものであり、印刷本は対象外である。したがって、これらの図書館の何らかの目録から印刷本の記述方法を学んだという可能性は低いと言えよう。

5. 印刷販売書目録

ゲスナーは BV2-1 および BV2-2 の各分類巻頭で同時代に活躍した印刷業者に讃辞を送り、彼等の業績を讃えている⁴⁷。このような印刷業者が発行した印刷販売書目録は 1460 年代から知られており、印刷予定書の宣伝広告や印刷販売していた書物のリストが一枚刷りの印刷物として出回っていた。現在までに 15 世紀の印刷販売書の広告は 47 点⁴⁸ ないし 42 点⁴⁹ が知られている。15 世紀の印刷販売書目録の記述は著者、書名、巻数の域を出ず、また印刷業者の名前も発行年月も印されていないものが多かった。16 世紀に入るとこのような印刷販売書目録は各地で多数発行されたと思われるが、今日まで伝わっている資料は極めて限られている。1540 年代にロベール・エティエンヌ (Estienne, Robert, 1503-59) を始めとするパリの印刷業者が八折判の目録を盛んに発行したことが知られている⁵⁰。しかし、ゲスナーが引き写したこれらの目録の現物はほとんど残っていないため、極めて貴重な資料である⁵¹。

ゲスナーは BV1 の序文中で、

Materiam operis undecunq<ue> corras: ex catalogis typo | graphorum, quorum non paucos diuersis è regionibus conquisiui: …(著書の材料をあらゆるところからかき集めました。印刷業者の目録から、それらの少なからぬ数は遠く離れた諸地方から捜し集めました。…) (BV1, *3r)

と述べて、資料の筆頭に印刷業者の目録を挙げて、その重要性を示唆している。また BV2-1 の序文でも次のように述べ、これらの目録を多数収集していたことを述べている⁵²。

Typographi & bibliopolae plaeriq<ue>, | … | ..., tabulas et indices librorum | à se impressorum aut uenialium habent, | quorum nonnulli etiam libellis excusi | sunt; ut, | Aldi Manutij in fol. chartis 3. | Froschoueri nostri in 8. Quem nos con= | secimus, chartis 2. | Crata<n>dri Basiliens<is>. typographi defuncti. | Et Parisijs Roberti Stephani, Colinaei, | Vucheli trium praestantissimorum | typographorum. | In tabulis autem impressi sunt Basiliens= | sium aliquot typographorum<m>

indices, | ut Frobenij, Isingrinij, Henrici Petri, | Heruagij, Oporini, et Roberti Vuin | ter : item Gymnici Coloniensis. (非常に多くの印刷業者と書店は、(中略) 彼らによって印刷された書物、あるいは売り物の書物の一覧と索引を持っている。その上、それらの少なからぬものは次のような小冊に作られている。アルドゥス・マヌテティウスのものは二折判で3葉。我らがフロシャウアーのものは八折判で、私たちが作っているもので2葉。バーゼルの印刷業者クラタンデルは亡くなった。そしてパリのロベール・エティエンヌ、[シモン・ド・] コリース、ウェシエルのもは、3つの最も秀でた印刷業者のもの。一覧にはその上、次のようなバーゼルの他の印刷業者の印刷された索引がある。つまり、フローベン、イーゼングリン、ヘンリクス・ペトリ、ヘルワギウス、オボリヌス、ロベルト・ヴィンテル、またケルンのギムニクス。) (BV2-1, 21r)

そのことから、ゲスナーはBV2-1とBV2-2に取上げた印刷業者の目録以外にも他の多くの業者の目録を収集していたのであり、ゲスナーが彼等の活動をよく知っていた人々であったことがわかる。

ゲスナーが選択した20の印刷業者のうち、彼等の印刷販売書目録を引き写した業者は次の7業者である。

1. クリストフ・フロシャウアー (Christoh Froschauer, 1490-1564), チューリヒ (目録: BV2-1, *6r-v)
2. パオロ・マヌーツィオ (Paolo Manuzio, 1512-1574), ヴェネツィア (目録: BV2-1, 107v-109r)
3. セバスティアン・グリフィウス (Sébastien Gryphius, 1492-1556), リヨン (目録: BV2-1, 117r-119v)
4. クレティアン・ウェシエル (Chrétien Wechel, 1522-54), パリ (目録: BV2-1, 165r-166v)
5. ヨハン・ギムニクス (Johann Gymnicus, 1485-1544), ケルン (目録: BV2-1, 257r-258r)
6. ジャン・フレロン (Jean Frellon, d. 1568), リヨン (目録: BV2-1, 261r-v)
7. ヒエロニムス・フローベン (Hieronymus Froben, 1501-63) とニコラウス・エピスコプス (Nicolaus Episcopus, 1501-63), バーゼル (目録: BV2-2, a2r-a3r)

彼等の印刷販売目録の記述方法を見てみよう。これらの目録の前提として、すでに印刷者と印刷地の記述要素は自明であるということである。

5.1. フロシャウアーの目録

目録のタイトルは次の通りである。

CATALOGVS LIBRORVM QVOS CHRISTO= | PHORVS FROSCHOVERVS TIGURI PV-
BLICAT. Vbi duo reprimuntur numeri, prior indicat annum Donimi, quo | singuli excusi sunt post
millesimu<m> quingentesimu<m>: po= | sterior formam siue magnitudinem chartae : | quemadmo-
dum etiam qui | unicus fuerit. (チューリヒのクリストフォルス・フロショウェルスが刊行した
書物の目録。2つの数字が見られる時には、最初の数字は主の年を示しています。それゆえ、そ
れぞれは1500年以後に作られたものです。続く数字は、さらにそれが唯一であるように形ある
いは紙の大きさを示しています。)

目録は全体が、文法学・修辞学 (Grammatica & Rhetorica), 世界誌 (Cosmographia), 詩学 (Poetica),
道徳 (Moralia), 医学 (Medica), 神学 (Theologica) に分類されている。

書誌記述は次の通りである。

THEODORI Bibliandri Institutionum Gramma= | ticarum de lingua Ebraea liber 1. 35. 8. (テオ
ドルス・ビブリアンデルのヘブライ語文法提要1書, [15] 35年, 八折判)

つまり、著者名、書名、巻数、印刷年、判型の順序で記述されている。「35」を印刷年とみなす理由は
目録の説明にある通りである。しかしながら、15番目の書物の記述では、

Dictionarum Latinogermanicum. Opus iam recens in | (6 lines) | ... per Petrum Cholinum, & Ioa-
nem Frisium Hel | uetios. 1541 F. & 4. (ラテン語ドイツ語辞典, まさに最近の作品... ヘル
ウェーティア (スイス) 人ペトルス・コリンとヨハネス・フリシウスによる。1541年, 二折判
と四折判)

とあり、印刷年が例外的に4ケタになっている。ここでは二折判にF.を使っているが、「道徳」の
分類では‘in Folio’が使われている。また、「詩学」の分類にあるMartialisの著作では‘44. 8.
chartis 28.’とあり、印刷年、判型、紙葉数が記載されている。このリストでは、このような記述方
法ですべてが統一されているわけではなく、中には印刷年がなく判型だけが示されていたり、著者・
書名のみで印刷年や判型が記述されていないものもある。

目録に収録された印刷本の刊行年が1535年から1548年の範囲であることから、BV1を執筆する
際にはこの目録はまだ発行されていなかったため、ゲスナーは参照できなかったということになる。
ところが、フロシャウアーはすでに同様な目録を1543年に印刷しているため⁵³, ゲスナーは1543
年版についてはBV1で利用したはずである。目録には印刷本を同定するのに必要な印刷年と判型、
さらには例外的であるが紙葉数が記述されている点は重要である。つまり、この目録の記述要素は、
印刷者、印刷地、著者名、書名、印刷年、判型、例外的に紙葉数となろう。

5.2. パオロ・マヌーツィオの目録

目録のタイトルは、

CATALOGVS LIBRORNM, QVI IN | OFFICINA ALDI MANVTII PLAERIQUE | omnes
intra annum Domini M. D. XXXIII. | Venetijs excusi sunt. (ヴェネチアのアルドゥス・マヌティ
ウスの工房でほとんどすべてが 1534 年のうちに作成された書物の目録)

とあり、目録が 1534 年頃に作成されたことを明記している。目録全体はギリシア語、ラテン語、イ
タリア語の言語に大別され、ギリシア語書が 100 タイトル、ラテン語書が 109 タイトル⁵⁴、イタリ
ア語書が 13 タイトル収録されている。

書誌の記述についてアリストテレス全集を例にして見てよう。

Aristotelis opera, quatuor uoluminibus: quibus etiam | Theophrasti libri omnes
adiunguntur: & Alexan= | dri Aphrodisiensis problemata. In folio. (アリストテレス作品集 4 巻、
さらにそれらにはテオフラストゥスの全ての書とアレクサンデル・アフロディシアスの命題集
が加えられている。二折判。) (BV2-1, 107v)

ここでは全体が何巻本であるのかははっきりしない記述であるが、実際にはアルド版のギリシア語版
アリストテレス全集は 1495-98 年にかけて刊行された 5 巻本である。基本的な記述要素は印刷者・
印刷地と言語、著者名、書名、判型である。ところが、この目録の最後のイタリア語書の中に次の
記述がある。

Commentarij delle cose de Turchi, di Paulo Giouio & | Andrea Gambini con gli fatti & la uia di
Scan= | derberg. In 8. Anno 1541. (パオロ・ジョヴィオとアンドレア・ガンビニのトルコ人に
関する注釈。スカンデルベルクの事績と生涯付き。八折判, 1541 年。) (BV2-1, 109r)

ここでは例外的に印刷年が記述されている。ところが、上記のようにこの目録が 1534 年に作成され
たとすると 1541 年刊行の本書がなぜ収録されているのか問題となる。1534 年という年はパオロ・
マヌーツィオが義父トッレザーニ (Torresani) の印刷所から独立した翌年であるため、このような
印刷販売書目録を新たに発行しても不思議ではない。ゲスナーが収集したこの目録は 1534 年版に基
づいて 1 点のみ追加されたものである。上記の印刷本の書誌は実際のタイトルを基に記述している
ため、本書をよく知っていた者が加えたと考えられるが、増補に当たって 1534 年以降に刊行した印
刷本 42 タイトル⁵⁵の中から本書のみを追加したというのはとても奇妙である。この目録は基本的
には 1534 年頃発行であったのではなかろうか。この目録の記述要素は基本的には印刷者、印刷地、言

語、著者名、書名、判型であり、例外的に印刷年である。

5.3. グリフィウスの目録

目録のタイトルは、

CATALOGVS LIBRORVM APVD | SEBASTIANVM GRYPHIVM | Lugdoni excusorum. (リ
ヨンのセバスティアン・グリフィウスのもとで作成された書物の目録)

と単純である。全体は文法書 (libri grammatici)、雑書および文献学 (Varia & Philologica)、道徳・その他哲学 (Moralia, & philosophica)、論理学 (Dialectica)、修辞学・弁論 (Rhetorica & orations)、詩人・詩学 (Poetae, & poëtica)、歴史 (Historica)、数学 (Mathematica)、物理・田園に関する事項 (Physica, & de re rustica)、医学 (Medica)、市民法に関する書物 (Libri in iure ciuili)、神学 (Theologica) という 11 分野に分類している。ゲスナーが行った BV2-1 と BV2-2 にわたる分類目録の分類の順序とも似た点が見られる。書誌記述はタイトルによって精粗があるが、詳しい記述の例は次のようである。

L. Vallae antidotorum in Poggium libri 4.

In eundem dialogi 2.

In Ant. Raudensem libellus.

Epistola Apologetica.

Inuectiuae in Morandum.

In Faccium & Panormitam libri 4.

In Bartoli de insignijs et armis libellum, 1532. In 8. (BV2-1, 117r)

この書はロレンツォ・ヴァッラ (Valla, Lorenzo, 1407-57) の論集であり、実際には書名の最初にある Lucubrationes aliquot Laurentii Vallae (ラウレンティウス・ワッラのいくつかの労作) という語句が省かれているが、続く 7 書の書名がタイトルページの記述を相当に略しながら記述されている⁵⁶。そして、最後に 1532 年、八折判となる。つまり、記述要素としては、印刷者、印刷地、著者名、書名 (コンテンツを含む)、印刷年、判型となる。このグリフィスの目録では印刷年が大半のタイトルに記述され、1528 年から 1542 年の間にあるが、最後のタイトルだけは 1547 年であり⁵⁷、他のものと年代的に隔たりがあるため、最後の 1 点だけをグリフィウス自身が増補したとは思えない。つまり、この目録は 1542 年に作成されたものであり、その後 1547 年に何らかの理由で増補されたのであろう。

5.4. ウェシエルの目録

目録のタイトルは次の通りである。

CATALOGVS LIBRORVM, QVOS | SVIS TYPIS CHRISTIANVS VVECHELVVS LV= |
tetiae Parisiorum excudit. Ad scriptum est pretium secundum | denarios & solidos Parisienses.
Denarij siue numi 12. | solidum constituunt : solidi autem 30. Flore-| num Germanicum, siue |
bazios 15. (BV2-1, 165r) (パリのクリスティアヌス・ウェケルスが自分の活字によって作成した書物の目録。記述の後にはパリのデナリウスとソリドゥスに従った価格がある。12 デナリウスあるいはヌムスが1 ソリドゥスと定められており、さらに30 ソリドゥスがゲルマニアの1 フロレヌス、あるいは15 バジウスと定められている。)

目録全体は、文法 (Grammatica) (ヘブライ語, ギリシア語, ラテン語に分ける), 論理学 (Dialectica) (ギリシア語, ラテン語), 修辞学 (ギリシア語, ラテン語), 弁論術 (Orationes, & similis argumenti) (ギリシア語, ラテン語), 歴史 (Historica) (ギリシア語, ラテン語), 詩学 (ギリシア語, ラテン語), 道徳 (ギリシア語, ラテン語), 自然学と数学 (Physica & Mathematica) (ギリシア語, ラテン語), 神学 (ヘブライ語, ギリシア語, ラテン語), 法律 (Legalia) (ギリシア語, ラテン語), 医学 (Medica) (ギリシア語, ラテン語) と11分類され、グリフィウスの分類とも類似する。しかし、各分類でヘブライ語, ギリシア語, ラテン語の言語別にタイトルを明示している点は厳密である。

書誌の記述は上記の目録のタイトルの説明にある通り、記述の後に価格が記載されている。1例をあげれば、

Institutionis grammatices Graecae Theodori Gazae libri | 4. cum uersione Latinae è regio= | ne, 3.
s. 6. d. (テオドロス・ガザのギリシア語文法提要4書, 場所によってラテン語版付き, 3 ソリドゥス6 デナリウス。) (BV2-1, 165r)

ここでは、書名, 著者名, 巻数, 注記, 価格となっているが、印刷年と判型はない。そのため、この目録がいつ発行されたのか不明である。つまり、この目録の目的は主に販売であり、版の特定はあまり考慮されていない。

5.5. ギムニクスの目録

目録のタイトルは次の通りである。

CATALOGVS LIBRORVM, QVI EX | OFFICINA IOAN. GYMNICI COLONIAE PRO= |
diuerunt. Cifra numerum chartarum indicat. (ケルンのヨアンネス・ギムニクスの工房から生み

出された書物の目録。数字は紙葉数を示している。）

目録は、詩人 (Poetae)、史学 (Historiographi)、様々な著者 (Authores varii)、神学 (Theologica)、論理学 (Dialectica)、ギリシア語文法 (Grammat. Graeca)、ラテン語文法 (Grammatica Latina) に分類され、分類方法が独自である。目録の記述の例は次の通りである。

Ouidij Meamorphosis, 38. (オウィディウス『変身譚』, 38 枚) (BV2-1, 237r)

印刷者、印刷地、著者、書名、紙葉数という簡単な記述で統一されている。紙葉数を記載する例はフロシャウアーにも例外的に見られたが、このように重視した点はユニークであり、ゲスナーへの影響も考慮されるが、印刷年の記述がないため目録がいつ発行されたのか定かでない。

5.6. フレロンの目録

目録のタイトルは次の通りである。

CATALOGVS LIBRORVM LVGDVNI | EXCVSORVM APVD FRELLONIOS. (リヨンのフレロンのもとで作成された書物の目録)

目録全体は、人文主義者の作品における書物 (Libri in humanioribus literis)、医療書 (Libri Medicinales)、市民法における書物 (Libri in Iure Ciuili)、神学書 (Libri Theologici)、ガリアについての書物 (Libri Gallici) に分類されており、大変ユニークである。目録の記述例は次の通りである。

Des. Erasmus de ciuilitate morum, cum scholijs Gilberti Longolij, 1539. in 8. (デンデリウス・エラスムス、礼儀作法について、ギルベルトゥス・ロンゴリウスの注付き, 1539 年, 八折判) (BV2-1, 261r)

ここでは、著者名、書名、付録、印刷年、判型の記載があり、版の同定が可能な情報である。この目録に収録された印刷年の範囲は 1536 年から 1543 年の間である。ゲスナーがこの目録を 1543 年のフランクフルトの大市で入手したとすれば、BV1 を執筆する際に参照できたことになる。

5.7. フローベンとエписコプスの目録

目録は BV2-2 の冒頭にあり、次のタイトルを持つ。

INDEX LIBRORVM OFFICINAE ET TABERNAE | Frobenianae Basileae, usq<ue> ad ini-

tioum anni 1549, ordine literarum. (1549 年のはじめまでのバーゼルのフローベンの工房および商店の書物の索引, アルファベット順)

この目録はこれまでの目録とは異なって著者名アルファベット順に編集されている。アルファベットの各文字の先頭行は目立つように左側に一文字分飛び出している。記述例をあげてみよう。

Arriani Cosmographia, Graece. (アッリアノス世界誌ギリシア語版) (BV2-2, a2r)

記述要素は著者名, 書名, 言語の記述であるが, 言語についてはギリシア語とヘブライ語のみ記載されている。一方, フローベンはエラスムスの著作を出版したことで知られているが, この目録でもエラスムスだけは全集のコンテンツが一覧されている (BV2-2, 2av)。しかし, 印刷年, 判型などの記述はない。この目録は 1549 年に発行されたため, ゲスナーは BV1 の編集の際には見ていないものである。

以上, 印刷業者が発行した印刷販売書目録を調査したが, これらの中で印刷年, 判型などの情報を記載していたのはフロシャウアー, グリフィウス, フレロンであり, パオロ・マヌーツィオは 1 タイトルのみで印刷年が記載されていた。一方, ウェシエルは価格を記載したが, 印刷本の同定を念頭においた記述ではなく, ギムニクスは紙葉数を記載するというユニークな方法をとっていた。また, フローベンはエラスムスの全集のコンテンツを簡略ながらも記載していた。

以上の目録のうち BV1 が刊行された 1545 年以前にゲスナーが入手することができたものはマヌーツィオとフレロンのものであろう。一方, フロシャウアーの目録は 1548 年発行であるが, それ以前からゲスナーはフロシャウアー刊行書については十分な情報をもっていたはずである。また, グリフィウスの目録は 1542 年頃発行され, おそらくゲスナーはそれを入手していたはずである。つまり, ゲスナーが BV1 を刊行する以前にすでに印刷業者は印刷本の目録には印刷者, 印刷地, 著者名, 書名, 印刷年, 判型, 紙葉数という記述要素を認識して記載していたのであり, ゲスナーもそれらを十分に知っていた可能性が高い。

これらの目録の記述要素を考慮すると, ゲスナーの書誌の記述要素の中で印刷地, 印刷者, 印刷年, 判型, 紙葉数については, これらの印刷販売書目録に起源が見いだせるのではなかろうか。しかし, ゲスナーが記述したコンテンツは相当に詳細であるため, これらの目録に見られる簡略なコンテンツに起源を求めることは困難であろう。

6. ゲスナーの書誌記述の独創性

それでは, ゲスナーは上記のような印刷販売書目録の情報を単に『万有書誌』に書き写したのであるか。彼がこれらの情報を実際『万有書誌』にどのように反映していたのか見てみよう。ゲスナーは BV1 でラテン古典文学の注釈家であるアントニウス・ゴウェアヌス (Antonius Goveanus, スペイ

ン語名 António de Gouveia, ca.1505-66?) の項目で次のように記述している (番号は筆者が付与)。
(BV1, 58v)

1. ANTONII Goueani Lusitani epigra<m>mata quaedam & epistolas quatuor Gryphius | impressit
Lugduni, anno 1539. |
2. Virgilij opera castigauit, & Terentij comoedias suis uersibus restituit, quae ide<m> |
Gryphius excudit, 1541.

ここではグリフィウスの2点の印刷本が言及されている。グリフィウスの印刷販売書目録を見ると、次の2つの記述が見つかる (番号は筆者が付与)。

- ① Ant. Goueani epigrammata, 1539. (BV2-1, 118v)
- ② P. Vergilij opera, cum scholijs Philippi Me= | lachtnis, 1531. Rursus per Antonum Gouea |
num castigata anno, 1541, Rursus in 16. (BV2-1, 118r)

1の記述は①と対応し、2の記述は②の最初の Rursus 以下の下線部と対応していることは明らかであるが、②のメランヒトンの注釈付きの1531年版と最後の16折判についてはゲスナーは採録していない。したがって、ゲスナーは印刷販売書目録をBV1に引き写したのではなく、それぞれの本の標題と中身を調査した上でBV1に記述したことが判明する。

次に、ゲスナーが印刷本を比較した記述を示してみよう。15世紀から16世紀のルネサンス時代にヨーロッパで最もよく読まれ、盛んに各地で印刷刊行された書物が古代ローマの哲学者キケロの一連の著作である。

M. Tulij Ciceronis opera primus [sic] excudit Aldus Venetijs, deinde Cratander Basileae, |
postea Heruaginus ibidem quatuor tomis distincta ad uetutissimorum codicum | collatione<m>
multis in locis ultra superiores aeditiones restituta, cum indice & anno | tationibus uariarum
lectionu<m>, 1534 in magno fol. Chartis 477. & Rob. Stephanus | Parisijs fol. 1539. ex P. Victo-
rij codicibus elegantissimis characteribus ; & Rihe- | lius Argentorati, 1540. in 8. rhetorum dun-
taxat [sic] libris in 4. impressis, ex emenda= | tione Ioan. Sturmij post postremam Naugerianam
et Victorianam correctionem, | ita ut Aldinae aeditioni omnia & paginarum & uersuum numero
atq<ue> longitudine | respondeant, cum indicibus in singula uolumina. Paulus Manutius Aldi filius
| eodem anno & sequente Venetijs (praeter Rhetorica impressa, 1533.) omnia de in= | tegra
Ciceronis opera excudit.

(M. トゥリウス・キケロの作品集ははじめにヴェネチアのアルドゥスが作成した。次にバー

ゼルのクラタンデル、続いて同地のヘルワギウスが、多くの場所にある非常に古い写本の対比によって4巻に分けることで、より優れた版を再建した。索引と様々な節の注釈つき、1534年、大型二折、477葉。そして、パリのロベルトゥス・ステファヌス、二折判、1539年、P. ウィクトリウスの写本に由来し、最も洗練された文字であった。そして、シュトラスブルクのリヘリウス、1540年、八折判、修辞学の書だけは四折判で印刷した。ナウゲリアヌスとウィクトリアヌスの最後の修正の後に、ヨハネス・ストルミウスの訂正によって、アルドゥス版に全体でも部分でも詩行も長さもちょうど一致するようにした。各巻索引付き。アルドゥスの息子パウル・マヌティウスは同じ年と続く年にヴェネチアでキケロの全集を新たに作成した(1533年印刷の修辞学は除く。)(BV1, 495v-496r)

つまり、キケロ作品集の刊行の経緯について、アルドゥスを嚆矢として(1517年)、クラタンデル(1528年)、ヘルワギウスに言及し、ヘルワギウスの優れた校訂の4巻本、そしてリヘリウスの1540年版を説明し、最後にアルドゥスの息子パオロによる新版作成(1540-41年)まで言及している。記述要素は印刷地、印刷者、印刷年、判型、葉数が含まれている。このような作品集の記述に続いて、ヘルワギウス版4巻本キケロ全集の各巻のコンテンツを詳細に列挙して、全集の全体を詳しく解説しているのである(BV1, 496r-497r)。

上記の記述から判断して、ゲスナーがいかに印刷本の出版に関心があり、その情報を印刷業者の印刷販売書目録を広く収集することで知り、さらにそれらの目録情報では十分に知ることのできない記述要素と内容あるいは序文について現物を調査し、書誌情報を『万有書誌』に順序良く詳細に記録していったのであろう。

ところが、グリフィウスも自身の目録にキケロ全集1540年八折判を掲載しているが、ゲスナーはそれを無視するかのようにここでは言及していない。したがって、ゲスナーは印刷業者の目録に掲載されているものをなんでもかんでも採録したわけではなく、取捨選択していたと言えよう。ゲスナーが実際にBV1に採録した印刷本の相当数はスイス国内で刊行されたもので、続いてその周辺のシュトラスブルク、ケルン、リヨン、パリ、ヴェネツィアなどの主要印刷都市で刊行されたものである。それ以遠の遠隔地の出版情報は極めて限られている⁵⁸。つまり、入手可能な印刷本についてできるだけ正確な書誌情報を提供し、それらの中で優れた著者の著作についてはコンテンツや序文などのさらに詳しい情報を提供して文献へのアクセスを可能にするということであれば、それは書誌コントロールの考えの芽生えとでも言えるのではなかろうか。これらの点がそれ以前には誰もなしえなかったゲスナーの独創性であるといえよう。

7. まとめ

以上、ゲスナーが参照した3種類の情報源を調査したが、分野別の情報源には著者の伝記事項と著作一覧(著者名、書名、巻数)があるものもあるが、多くは著者と著作内容についての説明や評

価が記述されているもので、印刷本の書誌を記述するための要素を提供するものではなかった。そして、図書館目録は当時の図書館の蔵書が写本を主体としていたため、印刷本の目録を作成するための記述要素はいまだ未発達であったと考えられる。一方、印刷業者の印刷販売書目録は他の業者の版との違いを示して販売を促進する必要性から、印刷地、印刷者、印刷年と判型、あるいは紙葉数、価格を記していた。このことから、印刷本の書誌の記述要素はゲスナーが『万有書誌』に取りかかるまでには印刷業者によってある程度備えられていた。ゲスナーは印刷本の普及に大変興味を持っていたため、同時代の印刷本の情報を知るために印刷業者の目録を広く収集し、そこに記述された目録情報と記述要素を知悉していたことは間違いない。その反面、それらの目録の記述の不十分な点も理解していたため、BV1の執筆に当たっては、単にこれらの目録を引き写すのではなく、できるだけ現物を確認し調査して書誌情報をより詳しくし、さらに様々な版を比較することでどの版が優れているのかという独自の評価も行っていた。これらの独自の情報を含めて、著者名、書名、印刷地、印刷者、印刷年、判型、紙葉数、コンテンツあるいは序文の引用というある程度システムティックな記述を確立したということが言えるのではなかろうか。

すなわち、ゲスナーは中世には存在しなかった印刷本の書誌記述の方法を同時代の印刷業者から学び、できるだけ多くの印刷本の情報を収集し、その中から閲覧できた版あるいは情報が入手できた版についてより正確に詳しく記述したのである。そうであれば、彼の中には正しい書誌を提示してその現物へのアクセスを可能にする仕組みである書誌コントロールの考えの芽生えがあったということができよう。その点がゲスナーの独創性であり、いうなれば近代性ではなかろうか。

最後に今後の研究課題を挙げておきたい。ゲスナーが確立した印刷本の書誌記述の方法はその後各地にどのように普及していったのか、そしてどのように一般化されていったのかという問題を詳しく検討することである。その過程を研究調査することで、今日社会一般で広く行われている印刷本の書誌記述の歴史的発展を解明することができるであろう。

[注]

- 1 雪嶋宏一、「コンラート・ゲスナー『万有書誌』の書誌的源泉」、『学術研究—教育学・生涯教育学・初等教育学編—』第59号、2010、p. 68-69。
- 2 Verzeichnis der im deutschen Sprachbereich erschienenen Drucke des 16. Jahrhunderts (VD 16) <http://www.bsb-muenchen.de/1681.0.html> (accessed 2012-10-17)。
- 3 Balsamo, L. *Bibliography: history of a tradition* / transl. by William A. Pettas. Berkeley, Calif.: Bernard M. Rosenthal, 1990, p. 34.
- 4 Ibid., p. 38.
- 5 Bottasso, E. *Storia della biblioteca in Italia*. Milano: Editrice Bibliografica, 1984, p. 23.
- 6 Escher, H. Konrad Gessner über Aufstellung und Katalogisierung von Bibliotheken. *Mélanges offerts à Marcel Godet*. Neuchâtel: Attinger, 1937, S. 125.
- 7 Balsamo, op. cit., p. 24.
- 8 雪嶋宏一、「コンラート・ゲスナー『万有書誌』と宗教改革」、『学術研究—人文・社会科学編—』第60号、2011、p.

- 68-69。
- 9 Serrai, A. *Conrad Gesner*. Roma: Bulzoni Editore, 1990, p. 92.
- 10 Leu, U. B., R. Keller, S. Weidmann. *Conrad Gessner's Private Library*. Leiden: Brill, 2008, p. 1-2.
- 11 雪嶋, 「コンラート・ゲスナー『万有書誌』の書誌的源泉」, pp. 55-61. なお, 拙稿「コンラート・ゲスナー『万有書誌』の書誌的源泉」では筆者の調査不足で次の重要な論文について言及することができなかった。戸田慎一, 「*Bibliotheca universalis* 編纂のための情報源」, 『図書館学会年報』 Vol. 33, No. 1, 1987, p. 1-9. 戸田氏にはここに記してお詫び申し上げます。
- 12 ゲスナーはBV1の序文の*3r-vでこれらの情報源について言及し, *6vで一覧にしている。
- 13 BV1, f. 267v: *Impressum autem illud opus de illustribus uiris ecclesiasticis cum quarto tomo D. Hieronymui; & cum Epiphania de prophetis, ac Hieronymo de ecclesiasticis scriptoribus, &c. Basileae apud Cratandru<m> in 4. chartis 3. & tribus quadratibus.*
- 14 雪嶋, 「コンラート・ゲスナー『万有書誌』の書誌的源泉」, p. 58.
- 15 ゲスナーの実例については, 雪嶋, 「コンラート・ゲスナー『万有書誌』の書誌的源泉」, p. 62-64 参照。
- 16 雪嶋, 「コンラート・ゲスナー『万有書誌』の書誌的源泉」, p. 58-59.
- 17 以降の分野別の文献についてはドイツ文献は上記のVD16のデジタル・アーカイブを利用し, フランス文献はフランス国立図書館のデジタル・アーカイブ Gallica, <http://gallica.bnf.fr/> (accessed 2012-10-17) を利用した。
- 18 ゲスナーが序文で記した本書の著者名・書名は 'Symphorianus Campegius, de scriptoribus medicinae: & alij quidam.' である (BV1, 6v)。
- 19 ゲスナーが参照したという1532年リヨン版の現物については詳らかにしない。
- 20 Besterman, T. *The beginnings of systematic bibliography*. Oxford: Oxford University Press, 1935, p. 10; Brodman, E. *The development of medical bibliography*. Baltimore: Medical Library Association, 1954, p. 4-5.
- 21 Fulton, J.F. *The great medical bibliographers: a study in humanism*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1951, p. 8.
- 22 Ibid., p. 16.
- 23 Besterman, T. op. cit., pp. 14, 61; Fuchs, W. *Juristische Bücherkunde: Geschichte und System der juristischen Fachbibliographie*. Göttingen: August Schönhütte, 1953, p. 1. フックスは本書ではこの書名を挙げていないが, 出版地, 出版年が一致しているため, 本書であることは疑いない。フックスは本書の所在が不明であることを注記している (Fuchs, op. cit., p. 1, Anmerkung, 1)。
- 24 雪嶋, 「コンラート・ゲスナー『万有書誌』の書誌的源泉」, p. 56-57.
- 25 雪嶋宏一, 「『アンゲルスの良心問題大全』について」, 『早稲田大学図書館紀要』第59号, 2012, p. 14.
- 26 1532年ケルン版のピベス『学問論20書』の第2部「学問伝授論 De tradendis disciplinis」については『ルネサンスの教育論』として邦訳されている (ヴィーヴェス著, 小林博英訳『ルネサンスの教育論』, 明治図書, 1964年 (世界教育学選集))。
- 27 本稿ではこのバーゼル版が参照できなかったため, 1580年にバーゼルのThomas Guarinが刊行した著作集を参照した (Lilii Greg. Gyraldi Ferrariensis Operarum quae extant omnium non minus Eruditae quam Elegae & deinceps expetendorum tomi duo)。
- 28 本稿では1545年版を参照できなかったため, 1513年にパリのJodocus Badius Ascensiusが刊行したクリントゥスの著作集 *De honesta disciplina, de poetis latinis, Ex poematum cum indicibus suis.* を参照した。
- 29 雪嶋, 「コンラート・ゲスナー『万有書誌』の書誌的源泉」, p. 56-58.
- 30 Labowsky, Lotte. *Bessarion's Library and the Biblioteca Marciana: six early inventories*. Roma: Edizioni di Storia e Letterature, 1979, p.291-325.
- 31 雪嶋宏一, 「イタリアの歴史ある図書館を訪ねて (続)」, 『イタリア圖書』Nuova Serie 44, 2011, p. 24-25.
- 32 前掲論文, p. 22.
- 33 Bottasso, Enzo. op. cit., p. 38.
- 34 雪嶋, 「コンラート・ゲスナー『万有書誌』の書誌的源泉」, 注16参照。
- 35 Fornasari, M., M. Poli, A. Zaccanti. *La chiesa e la biblioteca del SS. Salvatore in Bologna: centro spiritale e luogo di cultura*. Firenze: Vallecchi, 1995, p. 16-17.

- 36 Ibid., p. 17.
- 37 *Biblioteca Apostolica Vaticana*. Firenze: Nardini Editore, 1985, p. 21.
- 38 Müntz, Eugène & Paul Fabre. *La Bibliothèque du Vatican au XVe siècle d'après des documents inédits*. Paris : Ernest Thorin, 1887, p. 41.
- 39 Ibid., p. 135.
- 40 Ibid., p. 139.
- 41 *Biblioteca Apostolica Vaticana*, p. 22-24.
- 42 2012年8月30日にフィレンツェのメディチエーラウレンツィアーナ図書館を訪問して司書の Eugenia Antonici 氏から図書館の概要をうかがった。また, *Biblioteca Medicea Laurenziana*. Firenze: Nardini Editore, 1986 参照。
- 43 2012年8月31日フィレンツェのサン・マルコ修道院で実見。
- 44 ゲスナー BV1の序文で情報源に言及しているが、その中に ‘ex letteris amicorum’ (友人たちの手紙から) がある (BV1, 序文 *3r)。
- 45 BV1, 499v: è quibus (=opusculis) in bibliotheca Heydelbergen<sis> hodie manu sua scripta habentur. (ハイデルベルクの図書館にはそれら (論集) のために彼の手で書かれたものが目下所蔵されている。)
- 46 Hanhart, J. *Conrad Gessner: ein Beytrag zur Geschichte des wissenschaftlichen Strebens und der Glaubensverbesserung im 16ten Jahrhundert*. Winterthur: in der Steinerischen Buchhandlung, 1824, S. 115; Симон, К.Р. История иностранной библиографии. Изд. 2-е, исправленное. Москва: URSS, 2009, с. 124.
- 47 雪嶋, 「コンラート・ゲスナー『万有書誌』と宗教改革」, p. 68-69.
- 48 Pollard, G. and A. Ehrman. *The distribution of books by catalogue from the invention of printing to A.D. 1800 based on material in the Broxbourne Library*. Cambridge: Printed for presentation to members of the Roxburghe Club, 1965, p. 32-39.
- 49 Hellinga, L. Sale Advertisements for books printed in the fifteenth century. R. Myers, M. Harris and G. Mandelbrote (eds.). *Books for sale: the advertising and promotion of print since the fifteenth century*. New Castle, Del.: Oak Knoll Press, 2009, p. 1-25.
- 50 Pollard and Ehrman, op. cit., p. 52-57.
- 51 H. ルツはゲスナーが言及したこれらの目録にいち早く注目して、目録の概要とその背景にある印刷業者の関連する目録について言及している (cf.: Lutz, H. Konrad Gesners Beziehungen zu den Verlegern seiner Zeit nach seinen Pandekten von 1548. *Mélanges offerts à Marcel Godet*. Neuchâtel: Attinger, 1937, S.109-117)。Pollard and Ehrman, op. cit., p. 47-48.
- 52 Lutz, op. cit., S. 110.
- 53 Ibid., S. 117.
- 54 ラテン語書の中には、フランチェスコ・コロナナの作とされるイタリア語の問題作 *Hypnerotomachia Polyphili* (1499) が Polyphili Hypnerotomachia. in fol. と記述して含まれている (BV2-1, 108r)。そのため、ゲスナーは本書を、Polyphilus を著者とみなしてラテン語書として取り上げている (BV1, 568r)。
- 55 Renouard, A. A. *Annales de l'imprimerie des Alde, ou Histoire des trois Manuce et de leurs édition*. New Castle, Del.: Oak Knoll Books, 1991 (reprint of the 3rd edition, Paris, 1834), p. 110-124.
- 56 Bibliothèque Nationale de France の目録にはタイトルが次のように記述されている。Lucubrationes aliquot Laurentii Vallae [: Antidoti in Pogium libri IIII; In eundem dialogi II; In Antonium Raudensem annotationum libellus; Ad Alphonsum regem epistola apologetic; Invectivarum sive recriminationum, in Benedictum Morandum lib. II, in Bartolemaeum Facium et Antonium Panhormitam lib. IIII, in quorum ultimo sex Titi Livii de Bello punico libros ... restituit; item In Bartoli de Insigniis et armis libellum ad Candidum Decembrem epistola] ad linguae latinae restaurationem spectantes ...
- 57 Pandecta legis Euangelice Simone à Corroy profeßio- | ne Celestino autore, 1547. in 16. (BV2-1, 120r) とある。本書は Du Corroy, Simon が著した *Pandecta legis evangelicae* でグリフィウスが1547年に16折判で初版刊行したものである。
- 58 出版地・印刷業者の割合については目下データベース作成中のため、正確な数字を示すことができない。現時点では残念ながら印象的な予測に止まっている。

付記：本稿は早稲田大学 2012 年度特定課題研究助成費 (特定課題B) による研究の一部である。なお、本稿の概要は第 60 回日本図書館情報学会研究大会 (九州大学 2012 年 11 月 17 日) で発表した。